【臨床・研究】

島根県におけるRSウイルス感染症の発生動向調査

泉　信夫[1)]　糸川浩司[2)]

キーワード：RSウイルス，感染症発生動向調査（サーベイランス），
島根県，G遺伝子変異

要　旨

2004年1月よりRSV感染症の流行動向調査が始まり3季のデータをまとめた。2004/2005年，2005/2006年，2006/2007年の流行の総報告件数はそれぞれ32件，149件，250件であり06/07年は全国と同様に流行規模が大きかった。東部，中部，西部の流行は概ね歩調を揃えており，流行のピークが12月〜1月であることは3季に共通したが，流行の開始は12月，9月，11月と異なり，流行規模も同様ではなく，05/06年には中部でのみ2峰性に流行した。調査の主体は入院を要する重症例であり，流行規模の変動は重症度の変化と考えられる。これはウイルスの変異による可能性があり，RSVの接着G糖蛋白コード遺伝子の高度可変領域の変異に関して考察した。

はじめに

RSウイルス（以下RSV）は年齢を問わず生涯にわたり顕性感染をおこす。出生後，二冬を越すとすべてに近い児が感染をうけ，その後も小児の約20%が毎年，再感染をする[1)]。乳幼児期には下気道感染症，特に細気管支炎の原因ウイルスとして重要であり，入院する細気管支炎の原因の40〜75%を占める[1)]。

2003年11月の感染症法の改正によりRSV感染症の発生動向調査（以下，動向調査）が開始され，全国約3,000の小児科医療機関から報告されることになり，島根県でも2004年1月からスタートした（遅れた県もある）。

報告基準は「症状，所見から当該疾患が疑われ，かつ，病原体検出・抗原の検出・血清抗体の検出のいずれかの方法によって病原診断がなされたもの」となっている。実施される病原診断のほとんどは迅速診断キット（抗原の検出）によると考えられるが，この検査の保険適応は「入院中の患者」となっており，動向調査で把握されるのは，「重症RSV感染症の流行」といえる。

Nobuo IZUMI et al.
1）出雲市立総合医療センター小児科
2）島根県保健環境科学研究所，島根県感染症情報センター
連絡先：〒691-0003　出雲市灘分町613